

第十号

はまのうと 好貝

海老が故里

# 鵜沼



鵜沼を語る会

大震災前後からの鵜沼海岸（三）

高木和男 相模女子大教授

私が鵜沼海岸の地に初めて来たのは

大正七年（一九一八）の夏であった。

福田医院は海軍の軍医だったそうだが、名医で土地の人の評判はよく、門前に行列を作つて患者が並んでいたこともあった。

川崎は、川崎銀行の重役、左右田も左右田銀行の重役とも昭和のパニックで、小さくなつたが、川崎さんの方は、今は、当時の天賞堂の別荘のところに移っている。

岸田別荘とゆうのは貸別荘だったと思う。岸田劉生の鵜沼

日記（大正四年）に出るところである。この頃は貸別荘が多く、四軒別荘とか八軒別荘などとゆう名前が鵜沼日記に出てくる。

古い鵜沼は尼寺のあたりにあったらしい。尼寺は震災後堀川の現在のところに移った。田中邸とは、横浜の天下の糸平だという。赤別荘という貸別荘があった。

尼寺の場所が蘆花の思ひ出の記に出てくる鵜沼らしい。このあたりに旅館があったようだ。

私の父は大正八年に買った家が、余りに風通しが悪く嫌になつて、土地を捜していたらしい。鵜沼饅頭の中野さんが牛込へ来て、中屋の地所が売りに出ているといつて来た。

四、五〇〇坪の土地を三つに分けるとゆうことで、この中の角のところを買った。これが今のところである。そして大正九年に新築した。一、七〇〇坪で松林であったが、土地は低く大雨が降ると水がたまつた。この一区画の土地の東側が三輪別荘があつただけで海まで松林しかなかつた。海へ出たところ、今の遊歩道路のところは小高い砂丘となつていた。そのため水はけは悪く、排水は家の前を流れ

る下水溝だけであつたが、木の枠が入つていた。この下水は水がきれいで春にはソーメンコ（鰻の子）が沢山昇つて来た。

この溝は片瀬街道（山本橋え通ずる道）にある下水を合せて引地川の旧川に注いでいた。この家が建つて、大正九年から毎夏こゝへ来ることになつたが私だけはこの秋から鵜沼に住みつくことになつていたのである。

というのは、私は喘息で、すぐ風邪を引くし弱いので、祖父のガンの時に懇意になつた順天堂え、私を診てもらいにいったのである。父はそこで医師の診断を聞いて、恐ろしくあわてた。私には知らせないが肺結核で、しかもかなりひどいとゆうことであつた。家族に感染するといけないからということである。急遽、私を鵜沼の家に移すことになつて、祖母と一緒に行くことになつた。私は、まだ小学六年生であつたが、通学には無理ということ、父からうまく学校の方へ話

をして、教頭の五十嵐先生が日曜毎に来て家庭教師として六年後半をすませてしまおうという便法を考えたらしい。当時、小学校は全焼して（三月）六年生は江戸川小学校に分散されていて学校は区役所に事務所があった。校長と教頭はここにいて、それで話がついたらしい。こんな訳で私は卒業式には東京に行ったが、以来鵜沼に住むことになったのである。

大正十年の秋、大暴風が来て江ノ電の川袋の線路が流されて三日ばかり学校を休んだことがある。私は藤中に通っていた。大正六年の暴風雨は私が来る前だが鵜沼に来た大正八年にも、まだ日の出橋に行く道は荒れていた。

この時の津波は、堀川の水田をすべて埋没して、大平台あたりまで引地川の流れを変えてしまっていた。

この田に溜った海水が流れだすとき、旧尼寺の先のところに、

深い水溜りを作った。こゝで村の子供を死んだとゆうことを契機として、尼さんが毎日海岸から砂を少しづつ運んで一年位かゝつてとうとう埋めてしまったという。葉山又三郎が尼さんの執念に感心して話してくれた美談である。もう一つの水溜りは、今の雅叙園の裏のところ、こゝは下水道ができるまで、深い水溜りを作っていた。

大正十二年は大震災の年であるが、この年は世の不景気にかゝわらず、鵜沼海岸は大発展の時であった。

東久邇宮妃殿下が吉村別邸に避暑にこられるとゆうこと

になつて町内は大騒ぎであつた。この歓迎のために銀座

通りをはじめ、江ノ電から大曲を經るメイン道路の道

巾を広げることにした。鵜沼海岸の道路は伊東将行

が作った時に二間巾に作つてあつたのを一尺づつ両側から

だすことにしたのである。現在の四米二〇糎の巾は、その時

出来たものである。当時はどこも土地のゆとりがあつたから店も少し道路から中え入れて建て、いたし、松林は拡げるのも簡単で全員の合議でたちまち拡がった。この時公民館の通りでは拡げなかつたものと思う。

なにしろ、この夏は鵜沼の商人は張り切っていた。そして夏が終わつた時大震災が来たのである。商人達の中にはこのを期待して、店を新築したものもあつた。

斎藤百貨店はその一つである。しかし、全部震災にやられてしまつた。

私の家も九年に建ててこの年につぶれたから三年しか使わなかつた。別荘もこのようなものが多かつた。震災後の町並みは以前とはかなり変わっている。

今空地になつているところ、（長谷川豆腐店の東側）にあつた町内クラブ（集会所）は今の郵便局（前の）のところにあつた。（つづく）

一・名称 花沢町下水施設記念碑

二・所在 鵠沼一七九九

三・建立 昭和一四年八月

四・篆額「下水施設記念碑」と陽刻

五・碑文

花沢町は大正十二年関東大震災直後より漸次  
開発せられ昭和二年始めて町内会を組織し同  
六年下水施設の計を樹つ七年三月十三日発起  
人会を開き幾多の迂余曲折を経て漸く十一年  
三月関係者八十余名賛同の下に資金積立を開  
始し翌十二年四月三日起工式を挙げ同八月  
幹線二百五十間支線四百五十間総工費約五千

円也の大工事を竣成せり茲に有志相図り之を  
建て町内会発展の経過を伝へ併せて前後七個  
年に亘り滅私奉公献身的に努力せられたる石  
井君の功を領す

正五位勲四等 鬼俊民撰

米谷露香書

六・碑陰 井上四郎以下九十二名連記

実行委員 委員長 鬼 俊民

委員 石井房吉

以下一〇名

昭和十四年八月建之

藤沢駅前石工 林藤吉刻

七・備考 高さ一五四Cm 巾六〇Cm 台座一五Cm

鵜沼碑文集(その一二)

- 一・名称 鵜沼土地区画整理記念碑
- 二・所在 鵜沼神明二ノ一 皇大神宮表側
- 三・建立 昭和三五年四月一日
- 四・題額 「区画整理記念碑」と行書、陽刻
- 五・碑文

碑建立のことば

鵜沼土地区画整理は、この組合の初代組合長であつた斉藤正夫氏外二名發起人となつて神奈川県知事に組合設立認可の申請をし、昭和十八年十二月四日認可をうけて着手、以来組合解散に至るまで十七年三ヶ月の長期を経たのであります、その間戦争終末の世相混乱期に遭遇し事業は停頓状態を余儀なくされて

いたのであります、たまたま事業促進について関係当局の勧告と組合員から急速なる完成の要望があつたので、山上組合副長は昭和三十三年八月二十日総会を招集し再発足についての承認と、同時に役員の変更を行ない組合長宮崎忠太郎氏以下それぞれの役員を選出したのであります、かくて新役員は事業財源につき藤沢市及び日本精工株式会社による援助を求め、更に技術的援助を藤沢市長に要請するなどの処置を講じ、仮換地再設計、換地図縦覧、換地指定、設計変更公園敷地一千八百五十一坪九合二勺の確保など幾多の困難な問題を処理し、昭和三十五年三月十一日神奈川県知事から換地処分の認可を得て、同年三月三十一日の総会において組合を解散したの

であります。

ここに鵜沼土地区画整理は完成を遂げたのでありますが、この困難な事業に対し役員は協力一致完遂に努め、組合員もまた理解を以つて完成に支援された、その成果によつて完成を遂げたので、これを記念し碑を建立したのであります

昭和三十五年四月一日

藤沢市長 金子小一郎書

## 六・碑陰

地区面積

八万五千六十一坪一合一勺

組合長 宮崎忠太郎

副組合長 渡辺清作

日本精工株式会社

小島賢一

組合役員 浅場太郎吉 以下一七名

組合員 青木万吉 以下九一名

鵜沼碑文集(その一三)

一・名称 皇太神宮建立記念碑

二・所在 鵜沼神明二ノ一

三・建立 昭和一〇年八月四日

四・題額 「記念碑」と陽刻

五・碑文

此大鳥居は鵜沼出身横須賀市居住諸氏の奉納せられたる者にして其基因は氏子の馬居建設

の挙あるを聞き進んで奉納の申出あり氏子は喜んで受納せる次第なり抑も諸氏の挙は全く産土神社を敬慕する敬神の篤志に依る宜なる哉諸氏は独立独歩の成功者真に敬意を表せざるを得ず茲に鳥居建立の由来を記録し此の美挙を表せんとす時に昭和十年八月也

皇太神宮氏子総代 高松良夫撰並書

#### 六・碑陰

発起人 元町渡辺源次郎以下十二人

世話人 安浦町魚長加藤キク以下十人

賛成人 中里町上田良助以下二十一人

藤沢町 大工 加藤徳太郎

石工 林藤吉

鳶工 小菅三之助

#### 鵠沼碑文集（その一四）

一・名称 皇太神宮鳥居再建記念碑

二・所在 鵠沼神明二ノ一一 一の鳥居左側

三・建立 昭和三十六年一月

四・題額 「記念碑」とあり

五・碑文

それ当社宝前の旧鳥居は昭和十年鵠沼出身にして横須賀在住の篤志家関根治郎吉氏をはじめ幾多有志の絶大なる努力によりて奉獻せられしところなり爾来星霜を閲して風雪の削磨に朽ちあるひは神徳を害せむを畏るすなはち総代山上八造氏を中心に多数氏子の熱望を凝らし再建の機運ここに熟して昭和三十五年十月起工の式を挙げ同三十六年春正月吉朝

威容湘南の空を圧して竣成せり慶喜何かこれ  
に過ぎむ希くば神靈嘉納してとこしへに平和  
繁栄の恵沢を垂れ給はむことをいささか蕪辞  
をつらね来由を記すと云尔

昭和三十六年一月十七日 関根善之助撰

建設委員芳名

委員長 山上八造以下五二名連記

工事請負人関根長五郎

本鵜沼駅前大和工務店刻

鵜沼碑文集(その一五)

一・名称 首塚の碑

二・所在 鵜沼神明三ノ三ノ一七宮ノ前公民館前

三・建立 明治十二年二月

四・題額 「首塚」と隸書、陽刻

五・碑文 「内は欠落、欠落部分は藤沢

市史資料によつた。

許<sup>三</sup>はふるくよりあなる塚にしあれど、何の塚

てふことを知れる人も「なく、ただ里人の金堀

塚」あるは首塚或は庚申塚などとりどりに呼て

定かならぬを、今や「文明の御代にあい千世の」

古道明らけくなりゆく時にあたりて、かゝる

ことのゆえよしのしら「れぬこそ本意なけれと」

里長<sup>さとおほ</sup>関根<sup>のあほじ</sup>主<sup>を</sup>を始め里人のなげけるなんさるこ

となりけ「る、さるほど人々あい」かたらい塚を

あばきみるに、髑髏<sup>むくろ</sup>ふたも「脚骨四つ出」でけ

れば、それをひとつかめに納め、懇に「葬(はぶ)りのわ

ざいとなみてかくなん碑をたてたりける、され

「どいつの頃身うせたり」し武部たちのかばねなるかするよしのなきはいとも口をしかりける、「案ふにこのわ」たりは康正(一四五五)永正(一五〇四)の頃、殊に国の内乱れて戦かひのちまたになりしかば、其の頃の「ものと」も思はるれど証しにすべきものしなれば、其姓さへ名さへ知るよしのなきにつけても其世のさまのおしはかられて、此のわたりにすみけん人の如何に世をう(憂)くなげきつらんとおもふにも、我も人もなみ風たため御代に生れて、かくをのがみ(身)のやすくたのしき月日をおくるは、抑そもたかき御患ならずやといへば、人々も実にさることなりいかで其よしをと、こへるまゝにかい(書き)しるしぬ、神奈川県の里の旧き跡のしるしかきつくすることをうけた

まはりてつかうまつる

星野輝「蔵」

劔太刀とがみ野に身を尽くしける

むかしおみへば袖ぞ濡ぬる

くちはてし埋れかばねも明らけき

御代のひかりにあらはれにけり

明治十二年歳次巳卯二月改二

完

(昭和五五・四・七記・鵜沼松が岡)

鵜沼の石仏・石神編年表

伊藤節堂

8	7	6	5	4	3	2	1	
一七四〇	一七三七	〃	一七一六	〃	一七〇九	一六九六	一六八九	西曆
〃 五〃	元文二〃	享保元〃	正徳六〃	〃	宝永六〃	〃 九〃	元禄二年	造立年代
同	同	同	同	同	同	同	庚申塔	区分
本鵜沼二ノ八ノ一六地先	本鵜沼一ノ一四ノ八地先	同	鵜沼石上通り砥上公園内	鵜沼海岸七ノ四ノ一七地先	鵜沼石上通り砥上公園内	鵜沼神明一ノ五ノ三地先	鵜沼神明五ノ六白旗稲荷内	所在地
同	同	同	同	同	青面金剛立像浮彫り	同	文字碑	形態
五八	二二八	八三	一〇九	九七	一一五	八五	七六	総高センチ

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
一八三一	一八二〇	一八一六	一八一三	一八〇九	一七九七	一七九五	一七八八	一七八〇	一七七一	一七六二	"	一七五三
天保二年	文政三	" 一三	文化一〇	文化六	" 九	寛政七	天明八	安永九	明和八	" 一二	"	宝曆三年
弘法大師供養塔	弘法大師像	馬頭觀音像	庚申塔	出羽三山供養塔	馬頭觀音像	西国三十三所供養塔	庚申塔	地藏菩薩像	同	同	同	庚申塔
同	鵜沼海岸七ノ四ノ一七地先	本鵜沼二ノ四ノ三二地先	鵜沼石上通り砥上公園内	本鵜沼四ノ一三ノ二二地先	本鵜沼二ノ一五ノ二四地先	本鵜沼四ノ一三ノ二二地先	本鵜沼四ノ一六ノ一九地先	鵜沼海岸七ノ四ノ一七地先	鵜沼石上通り砥上公園内	鵜沼海岸七ノ四ノ一七地先	本鵜沼二ノ七ノ一七地先	本鵜沼四ノ一三ノ二二地先
文字碑	座像丸彫り	立像浮彫り	同	文字碑	立像丸彫り	文字碑	青面金剛立像浮彫り	立像丸彫り	文字碑	同	同	青面金剛立像浮彫り
五五	七二	六三	七七	一五九	一〇三	八七	七二	一〇	七五	八五	六〇	六〇

3 4	3 3	3 2	3 1	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2
一 九 五 八	一 九 三 三	一 九 二 五	一 九 二 一	一 九 一 九	一 九 〇 九	一 八 九 五	一 八 八 六	一 八 七 二	一 八 六 三	一 八 六 〇	一 八 五 二	一 八 四 四
” 三 三 ”	昭 和 八 ”	” 一 四 ”	” 一 〇 ”	大 正 八 ”	” 四 二 ”	” 二 八 ”	” 一 九 ”	明 治 五 ”	文 久 三 ”	万 延 元 ”	嘉 永 五 ”	” 一 五 ”
地 蔵 菩 薩 像	道 祖 神 塔	同	同	馬 頭 觀 音 像	道 祖 神 塔	同	馬 頭 觀 音 像	精 霊 供 養 塔	道 祖 神 塔	馬 頭 觀 音 像	道 祖 神 塔	二 十 三 夜 塔
鵜 沼 松 が 岡 四 ノ 一 九 ノ 五 踏 切 脇	鵜 沼 海 岸 一 ノ 一 ノ 六 地 先	鵜 沼 海 岸 七 ノ 五 ノ 一 八 地 先	本 鵜 沼 二 ノ 四 ノ 三 二 地 先	鵜 沼 神 明 二 ノ 四 ノ 二 〇 地 先	本 鵜 沼 二 ノ 七 ノ 一 七 地 先	鵜 沼 海 岸 七 ノ 五 ノ 一 八 地 先	本 鵜 沼 二 ノ 八 ノ 一 六 地 先	鵜 沼 海 岸 四 ノ 六 地 先	同	鵜 沼 石 上 通 り 砥 上 公 園 内	鵜 沼 神 明 二 ノ 五 ノ 一 九 地 先	鵜 沼 神 明 五 ノ 六 白 旗 稻 荷 内
立 像 丸 彫 り	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	文 字 碑
一 五 二	一 三 四	六 三	五 三	八 六	四 九	七 七	四 四	七 四	六 七	六 三	八 三	一 〇 二

4 1	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5
"	"	"	"	不明	一九七一	一九五九
推定 明治後期	推定 明治後期	"	"	不明	" 四六"	昭和三四年
同	同	道祖神塔	馬頭観音像	庚申塔	同	道祖神塔
本鵜沼四ノ六ノ一九地先	鵜沼藤が谷三ノ一九賀来神社	本鵜沼五ノ一〇ノ二六地先	鵜沼神明二ノ四ノ二四地先	鵜沼神明三ノ三ノ一七地先	鵜沼海岸七ノ一六ノ一七地先	本鵜沼四ノ六ノ一九地先
同	文字碑	双体像浮彩り	立像丸彫り	青面金剛立像丸彫り	同	文字碑
四一	五八	四五	七四	九一	五九	五七

( 昭和五五・五・一現在 )

- 一・この表は路傍の石仏・石神であつて、寺院・墓地などのものは含まれません
- 二・この表は単なる一覧表ではなく鵜沼における民間信仰の編年史ともいうべきものであります
- 三・太平の元禄から飢饉の天明まで凡そ百年間庚申信仰の最盛期であつたことを示しています
- 四・道祖神（サイノカミ）の初見が嘉永の年はおそすぎ、双体像が本鵜沼に一体だけは少なすぎると思います
- 五・この調査にあたり奥田直元氏のご協力を得ましたことを深く感謝いたします

( 昭和五五・五・三記、鵜沼松が岡五 )

私は生きるために東京にでてきた。

生きるためであった。

私達一家が借りた家は畠の中にポツンと建った二階家であった。南側のきわめて陽当たりの良い静かな家であった。下が六畳と四畳半、台所トイレがついたが風呂がなかった。その他に八畳二階が六畳であった。私達はその全部を借りたわけではない。八畳に大家である老婦人が住んでいた。すなわち部屋借りであった。しかし二階の六畳に同居人がいない間はよかった。私のもっぱら勉強部屋として使わせてもらった。前も後も麦畠が続くなだらかな丘陵であり、所々の菜の花畠が一段と彩りをそえていた。

農家の垣根や庭にはさまざまな花木があり特にボケが印象的であった。三月に入っていたのである。私は復学する高校を探して歩いた。私が移転したところは東京都板橋区下赤塚五七八番地、すなわち東京の最北端で荒川をはさんで埼玉縣と接していた。高校は北園高校、北野高校とあったがいづれも編入試験が終っていた。私は湯沢高校で二年の十月までしか行っていないから二年終了の学業証明書がくるかどうか不安であった。しかもそれがなかなか来ない。私はイライラして何度も秋田の方に連絡したがなかなか来ない。やっと到着した時はもう四月に入っていた。しかし、その学業証明書にはちゃんと二年間、無欠席でオール5がついていたのには私も驚いた。もう三年

も経っているからきつと困惑し、しかも私の立場を同情してこんな風に配慮してくれたのではないかと思った。

成績はたしかずっとオール5だったけれど二年の二、三学期と丸々行っていないのだからオール1をつけられてもしかたがない。けれど二年終了だけはほしかったのである。

それを手にするとすぐ私立の高校を探しに出かけた。

まさに犬も歩けば棒に当るで、きわめて無責任な方法だったけれど私にとっては真剣で、矢もたてもたまらぬ心境であった。たしかその日は天気がよかったから豊島園の

方にぬけた。どうゆうふうに歩いたかはよく覚えてはいない、

梅の花に誘われて千川堤を歩いていったような気がする。豊

島園から目白の方面に足をむけ哲学堂を通った。

そこでバツタリつき当たったのがその当時目白台、くわしくは

新宿区下落合にあった国学院高校の裏門であった。

新宿区下落合にあった国学院高校の裏門であった。

いかめしい屋敷門のようなくゞり門をぬけると広々とした運動場がありそれが美しい庭園で囲まれていたのである。私は一ぺんで気に入ってしまった。

私を面接してくれたのは国学院大学教授で高校長だった御巫清勇（ミカナギキヨタカ）先生と現高校長である小林武治先生である。学校が春休み中で二、三日後に学校が始まるうとゆう時にこの二人の学校責任者に会えたのが幸運だったといえよう。

二人の先生は私の古ボケた襟の高い学生服（父の将校服を黒く染めたもの）とチビタ下駄をみてウサン臭いような顔をしたが、応接室で二、三質問し、学業証明書を見て「いゝでしょう。」と入学を許可してくれた。天気がよかったから下駄だったけれど、若し少しでも曇り空だったら長靴をはいていったらどう。そしてその

長靴のために入学を許可されたかどうか、いま考えてみて、苦笑を禁じ得ない。

こうして私の新しい東京での高校時代が始まる。昭和二十七年四月だから年令は万二十才と七ヶ月になってまさに古ぼけた高校生であった。

さて、こうして私が高校に復学し、下の弟と妹が近所の小学校に通い出し、一家がやっとまとまってホツトしたところに、空いていた二階に大変な侵入者が入りこんできたのである。

黒人兵のトムとそのオンリーのユリ子ちゃんであった。

太平洋戦争が終わってもう戦争はコリゴリだし、絶対におのだと思っていた私達日本人のすぐ目の前で朝鮮

戦争が始った。同民族が殺し合う中に国連軍が介

入し、多くのアメリカ人が血を流し死んでいった。トムも又そんな遠いアメリカから血を流すためにやって来た一人だったのである。

(つづく)

昭和五十一年度鵜沼を語る会について

鵜沼公民館の改築工事のため、公民館は移転してプレハブで一年過ごすことになりました。

私も運営審議委員として、建設委員として、なんとか新しい公民館がよりよく、より早く出来上がりますようにと微力を尽くしてまいり、やっと六月初旬より工事に着手し、昭和五十六年二月一ばいで新しい公民館完成の見通しがつきました。

したがいました。現在迄「語る会」を中断しておりましたが、六月に一回、九、十月に会員の方々による研究発表会を行ないたいと企画をたてました。どうか夢の公民館建設中に会員の方々の素晴らしい研究がなされます様期待しております。

リーダー 伊藤 昌

昭和五十五年六月十九日発行

藤沢市鵜沼松ヶ岡五ノ十ノ二十五

藤沢市立鵜沼公民館内

鵜沼を語る会

電話 (26) 〇九三〇